Kameoka KIRI Art Cultivation Archive Book 2022

かめおか霧の芸術祭
アーカイブブック 2022

Kameoka KIRI Art Cultivation

霧は大地の呼吸である。

亀岡を包むその霧を深く吸い込み、大気の一粒一粒を身体に循環させ、人も野菜も野山も川も育ってきました。

明智光秀の鼻息、円山応挙のため息、町人や農家の寝息、いろんな吐息もまた、亀岡の盆地に消えては湧き立ち再び霧となって、私たちの体内を循環します。

「かめおか霧の芸術祭」では、この「霧」を象徴として捉え、たくましい「野良」の芸術を育てます。

「野良」とは有機的連関つまりオーガニックであるということです。

芸術家たちとの出会いが、霧の中に佇んでみないと見えない世界を見せ、ここではないどこかに連れて行ってくれ、亀岡一帯を驚きにあふれた芸術祭へと変容させます。

作品だけが芸術ではありません、生命や魂をより一層輝かす「技術」のことをそう呼びましょう。

美味しい野菜を育てることができる人、渓流を綱渡りのように舟を操ることができる人、悲しい人に寄り添える人、鳥と話せる人、へそで茶を沸かせる人、そんな芸術家がいっぱい暮らす霧の盆地で「かめおか霧の芸術祭」が始まります。

かめおか霧の芸術祭 総合プロデューサー
松井利夫

もくじ

かめおか霧の芸術祭について …… 4
霧芸の始まり …… 8

Hub 1 KIRI CAFE …… 12
キリカレー …… 14
野菜販売・雑貨販売 …… 16
World Civic Tour …… 17
Hub 2 開かれたアトリエ …… 18
開かれたアトリエ展覧会 …… 20
段ボール to アート展 …… 22
アートでつながるあなたとわたし展 …… 23
みんなで紡ぐドレス展 …… 24
10代のSDGs展 …… 26
FORMS + FEELINGS …… 28
図書コーナー …… 30

Project 暮らしを耕すプロジェクト …… 35
1 城跡芸術展 …… 36
2 KIRI² 芸術大学 …… 38
3 こどもみんげい …… 42
4 ボンボンマルシェ …… 48
5 KIRI WISDOM …… 52
6 アートコミュニケーター養成講座 …… 54
7 KIRI FARM …… 58
8 アート×環境 …… 60
9 アート×農林 …… 64
10 アート×教育 …… 68
11 霧芸×京都信用金庫 …… 72
12 霧芸×資源循環 …… 78

History …… 80

COLUMN

HOZUBAG …… 29
小屋の本 …… 47
農家に聞いたはなし …… 67
丹波亀吾郎かめやき …… 79

霧芸のはじまり

まさか現実になるとは思わなかった！

「京都市内から亀岡にアトリエを移して静かに制作しようと思っていたんですけど、桂川市長が亀岡の芸術家や作家に1人1人面談しておられて、それで市長に会うことになったんですね。その時に市長が瀬戸内国際芸術祭や越後妻有の大地の芸術祭のような『芸術祭を亀岡でもやりたい』と言われて。その話を聞いて、即『やめましょう』と言いました。『そんなことをしたら税金の無駄遣いだし終わったあとに地元には何にも残らないですよ』と。

僕は大学院で芸術環境研究という領域で、学生たちと全国の芸術祭を調査していたんですけど、まちの人たちが自分たちの地域の芸術祭についてあまり知らないし、知っていても有名な芸術家が来たことくらいだけ。大きなお金を動かして頑張っても地域にお金も人材も残らない。それって本当にもったいないので『やめましょう』と言ったんですね。そしたら市長は『どうやったらできますかね？』と聞くんです。それで『亀岡のまちの人たちの営みが芸術として見えるまちになったら面白いんじゃないですか？』とお話をしたら『それは面白いですね』と返事が返ってきて、この市長はただ者ではないなとむしろ緊張したのを覚えています。

それでも僕は芸術祭やまちづくりのプロでもないし静かに制作したいだけの陶芸家だから、『古民家を一軒用意していただけたら、そこをカフェに改装して、そこに集う人たちとどんな芸術祭を作っていったらいいか話ながら時間をかけて芸術祭を作っていけるかも』と、いい断り文句になるかなと思ってそんな話をしたんです。そしたら1週間後くらいに『古民家が見つかりました！』と市長から連絡があって、いまのキリカフェの古民家を紹介されて、もうビックリしました。場所は本当にいいところだし、学生にとってもすごくいいと思ったので、大学にも話を持ち掛けたら『やろう！』となって、そんな流れでキリカフェが誕生し、『かめおか霧の芸術祭』が始まっていったんですね」

低予算でもできることから

「最初の予算は400万円。この予算でまずは拠点をつくるところから始めました。市が用意してくれた古民家を、京都造形芸術大学（現京都芸術大学）の学生や教員のボランティアが来てくれて、みんなで片付けるところから始めて、壁を壊したり床を剥がしたりしながら自分たちで改装していきました。とにかく予算がないから全部自分たちでやる。椅子や棚も自分たちでつくる。でも結果的にはそれがよかった。決められたことを計画的にするのではなくて、この柱切ってもいいか、壁ぶち抜いて大丈夫か、その都度家と対話しながら作業を進めていくことで自分たちで考えてつくることを体で覚えていきました。ないものはどうやったら生み出せるか、そういうことを考えていくことが芸術祭をつくることに直結していったんですね。
半年くらいかかったかな？ キリカフェができて、まずやったことは、農家の有機栽培の野菜を地元の料理人が料理してみんなで食べること。市長や地域のおっちゃんおばちゃんも来てくれてこれからの芸術祭について語ったり、みんなの話を聞いたり、そうして少しずつ芸術祭の輪郭ができていきました」

百姓が主役になれる芸術祭

「僕らは百姓が主役になるような芸術祭ができたらいいなと思って始めたんです。イメージとしては、田んぼがひとつの舞台でアーティストはお百姓さん。土を耕し種を

芽吹かせ、花を咲かせ実らせ、野菜という作品をつくれる人も、キャンバスに下地を塗り絵の具で点と線を塗り重ね不思議な花を描ける人も同じアーティスト。それをみんなで分かち合える場所がマルシェであって、そのマルシェが芸術祭になればいいなと。そういうふうに考えて、土や野菜の展示やアート作品をマルシェという『場』でお披露目する催しを始めました。

そのうち環境をテーマにエコバッグのようなものが出来ないかという相談が市からあった時、キリカフェに向かう道すがら空にパラグライダーが浮かんでいたんです。あの生地なら軽くて強くて防水も効いてるからエコバッグにいいんじゃないかと、たまたまパラグライダーの「イカロスカップ世界チャンピオン」の田路雅敏くんが亀岡に住んでいたので相談して廃棄する機体を譲ってもらえることになって。さっそく大学の授業で一緒に組んでいたTHEATER PRODUCTSの武内昭くんに話を持ちかけたら、一辺が8mもの大きなBAGを空に浮かべようということになり、それを市民と一緒に切り貼りしながら世界に1つしかない自分だけのオリジナルエコバッグをつくるという「KAMEOKA FLY BAG Project」が始まりました。そこで生まれたエコバッグが『HOZUBAG』という名称に生まれ変わり、2019年にはパリで展示会が開かれるまでに成長しました。今ではキリカフェのお隣に『HOZUBAG Mfg.』という工場が稼働して全国から見学者が訪れています」

「形がない」を形にしていく

「一般的な芸術祭というのは芸術家の作品を展示してそれを見て終わり。そういうのが多いんですけど、亀岡の芸術祭はそうじゃない。暮らしの中に芸術があって、もっと言えば暮らしそのものがアートなんですね。市民ひとりひとりがアーティストだし、モノだけじゃなくて、先人の知恵とか職人の技とか、畑の美しい風景とか、形のないものも芸術作品なんです。そういった日々の営みや暮らしの耕しを年間を通して行っていく。これこそが「かめおか霧の芸術祭」なんですね。

形のないものを芸術として捉えて表現することって難しいし分かりにくいので、最初の数年間は「霧芸はなにをやっているのか分からない」とよく言われました。畑の野菜を展示してみたり、農家さんや料理人の話を聞いてみたり、職人の技を学ぶ講座をしてみたり、地域に出て話を聞いたり、地域の困りごとの解決を試みたり、子どもと一緒にものをつくってみたり、そんなことを積み重ねていたら、「アート×環境」「アート×農」「アート×教育」「アート×福祉」といった形で、元副市長の仲山徳音くんが素晴らしい提案書にしてくれて「SDGs未来都市」に認定されちゃった。

でも霧芸はSDGsを目指してやっているわけではないし、もともと霧芸がやってきたことそのものがSDGsであって、あとからSDGsがついてきた。全国を見渡してもこんな芸術祭はほかにはない。僕らがやっていることはまだ世の中にないものだから、分かりづらいかもしれないけど、確実に新しい価値観、新しい芸術を生み出していると思う。

「かめおか霧の芸術祭」がどこへ向かうのか？　それは僕らにも分からない。それは市民と一緒につくるものだし、こうと決めてやるものではないから。でも亀岡市という斜め上を行く地方都市だからこそそれができると思うし、それをさせてくれる沃野が亀岡にはあると思う」

かめおか霧の芸術祭 総合プロデューサー
松井利夫

Hub 1

かめおか霧の芸術祭の活動拠点

KIRI CAFE

多彩な人と情報が集まり繋がる場

かめおか霧の芸術祭はKIRI CAFEから始まりました。亀岡市の小高い丘陵地にある千歳町に建つ古民家を、京都造形芸術大学（現京都芸術大学）の学生とともに改修し、芸術祭の中心的な拠点にしようと2018年に誕生しました。

人気メニューは亀岡の旬の食材を使ったカレー。季節を感じさせる色とりどりの野菜とスパイスのバランスが絶妙で根強いファンが足繁く通います。また季節ごとに採れる果実を使ったシロップ割りや季節限定のメニューも。

店内には地域の農家さんがこだわり抜いて育てた野菜を販売するコーナーや、市内の作家による作品展示・販売もされていたり、亀岡へ移住を考えている人がふと相談に立ち寄ったり、モノだけでなく、人や情報が交差して常に新しい何かが生まれていく、そんな場所になっています。

キリカレー

ブロッコリーの脇芽と
スナップえんどう春カレー

のらぼう菜を炒め煮

実えんどうが目を引くほうれん草＆
カリフラワーでカレー

端境期突入カレー

ズッキーニとスイスチャードの
初夏カレー

パプリカ炒め焼きカレーに
つる紫を添えて

白丸なすとつる紫カレー
万願寺・パプリカ添え

早めの冬 白菜カレー

大根カレーに人参ラペ添え

白菜の塩漬けとカブの
ココナッツ炒め添え

ほうれん草緑と大根白の
冬カレー

亀岡の野菜をつかった季節の定番カレーが人気

KIRI CAFEといえばなんといってもこのカレー。旬の野菜をふんだんに使ったカレーが左右に2種類盛り付けられ、カラフルに季節を彩る。野菜の甘みと旨みがギュッと詰まったひと皿をたんとお召し上がりください。

野菜販売・雑貨販売

店内の野菜販売コーナーには亀岡産の旬の野菜が並びます。単なる野菜販売にとどまらず、農家さんの仕事や栽培方法などを伝えたり、作家さんの思いを伝えるなど、カフェの機能を生かした情報発信も行っています。

野菜

亀岡産のこだわり野菜は物販だけでなく、
カレーにもふんだんに使っています。

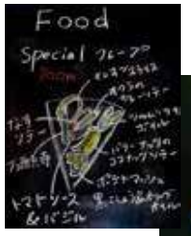
HOZUBAG

廃棄されるパラグライダー生地をアップサイクルして生まれた「HOZUBAG」は店頭で販売もしている。

World Civic Tour

多国籍の文化が交流する新しい場づくり

KIRI CAFEに音楽の要素を加えて、そこに集う新しい人たちが交流できる場を作ろうと始まった異文化交流のミュージック&カルチャーイベント。個々の内面を通して他の文化を知ることを目指し、世界の市民を尋ね回る「WORLD CIVIC TOUR」と名付けました。国を代表する料理や音楽ではなく、それぞれが体験した地域文化の断片を持ち寄って、その体験を参加者同士でシェアできる、そんなメニュー提供や音楽空間を目指して開催しています。



▲ 小麦の収穫を祝い開催したイベントでは、小麦を育てるお二人のお話を聞いたり、その小麦を使ったメニューを販売した。

Hub 2

亀岡市のSDGs推進の発信拠点

開かれたアトリエ

市役所地下に誕生したイノベーションハブ

亀岡市は2020年に内閣府からSDGs未来都市に、さらにはかめおか霧の芸術祭を中心とした取り組みが「自治体SDGsモデル事業」に選定されました。

「開かれたアトリエ」は自治体SDGsモデル事業のイノベーションハブとして、亀岡市とかめおか霧の芸術祭が協働し、ワークショップを開催して市民の意見も取り入れながら、亀岡市と協定を締結している京都芸術大学とその学生も参加して整備されました。

カフェ・レストラン、コワーキング、イベントスペース、作品展示、農産物の直売など多様な使われ方をする中で、多くの人々が出会い、イノベーションが創出され、SDGsの推進に資する場所となることを目指しており、かめおか霧の芸術祭もマルシェやワークショップなど様々な活用をしています。

1 展示コーナー

2つのコーナーに設置した展示用の壁面を活用して、年間を通して「開かれたアトリエ展覧会」や市民参加型の展覧会を行っています。

2 図書コーナー

かめおか霧の芸術祭と亀岡市立図書館が連携し、季節ごとにテーマを変えて選書した図書を配架しています。季節の選書をここで読んだり、気に入った本があれば、図書館で借りることもできます。

3 資材循環コーナー

作家やアーティストの工房・アトリエから出た端材や使わなくなった資材、工具などを有効活用し、自由に使っていただける場を提供しています。アトリエ内で自由に工作したり、端材類は好きなものを持ち帰ることもできます。2022年度は新たな棚を京都芸術大学の学生が作り、亀岡高校の学生がペイントして、新しいスペースが誕生しました。

4 情報発信収集コーナー

さまざまな人や情報の交流を目的に、亀岡市内や全国で発行・制作されているフリーペーパーを設置する「情報発信収集コーナー」を設けています。ここに置かれている冊子は無料で自由に持ち帰ることができます。

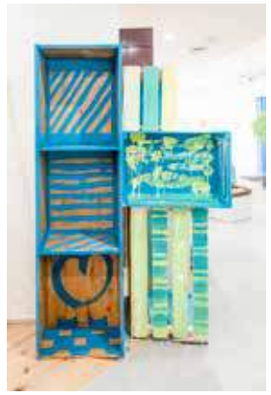
5 環境コーナー

亀岡市の環境政策の取り組みを知っていただく「環境コーナー」では、パラグライダー生地から生まれたHOZUBAGやリバーフレンドリーレストラン、給水スポットのフラッグ、レジ袋禁止から生まれた紙バッグなどが展示されています。

1

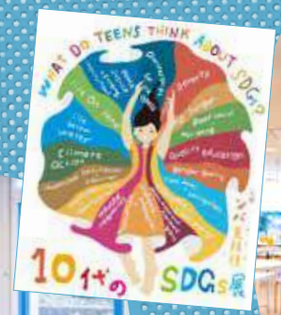
2

3



4

5



開かれたアトリエ展覧会

Exhibition

市民のみなさんに“開かれた”展示

開かれたアトリエでは、子どもからご年配の方々まで、職業や目的をこえて たくさんの方々が展示を通して繋がりを感じられるような企画をしています。今後も、より多くの方々に“開かれた”アトリエとなるよう、亀岡らしさを大切に 展示やワークショップを開催しています。

6/20-7/3 2022

段ボール to アート展

亀岡高校出身で嵯峨美術大学の学生、澤田太晟さんがダンボールを主素材に、廃棄される予定であった木片と石膏粘土を使って制作した作品３点（朝寝坊、海、ドア）を展示しました。作品の迫力と発想の面白さに、見る人たちは圧倒されました。「ダンボールを使ったのは材料に費用がかからなかったから」と、学生らしくまっすぐな澤田さんの人柄と、高校生のころに朝寝坊をして先生に叱られたときの体験や、コロナ禍で海に遊びに行けないもどかしさを表現したという作品の魅力に惹きつけられ、たくさんの方々が展示を見に来られました。

▲海

▲6月26日　ワークショップ
「ダンボールの切れ端で、自由に謎の生物を作ろう!」をテーマに、子どもたちを中心にたくさんの作品ができました。

▲朝寝坊

日本紙業有限会社さんのご協力のもと、古紙リサイクルの流れや、リサイクルに必要な知識のQ&Aも作成

7月2日には、「ボンバニカ」（作者澤田さんの父親とそのご友人）によるライブを開催。ダンボールにささげる3曲が演奏されました

8/4-25 2022

アートでつながる あなたとわたし展

知的障がい（かめのこ学級）、聴覚障がい（かめの会）、視覚障がい（ふれあい学級）のある方々が、講師、指導員やボランティアの方と一緒に制作した作品の展示「アートでつながる あなたとわたし」を開催しました。

作品の展示

● かめのこ学級
森太三さん（美術家）のワークショップで、たくさんのマスキングテープやシール、マジックで装飾された色とりどりなオリジナルの貯金箱と、ベリーマキコさん（画家）のワークショップで制作した、野菜をテーマに墨や絵の具、クレヨンなど色々な画材をつかって描かれた絵画を展示しました。

● ふれあい学級
俳句（あわせて点字も展示）、小物入れ（木工作品）、花の指輪や髪留め、ピンなどのペーパーアクセサリーを展示しました。

● かめの会
タンポポのペーパークラフトと、木のメガネケース（木工作品）を展示しました。

記録の展示

活動に関わる人たちの思いや日々共有している時間を、展示に来る人たちにも感じてもらえるよう、亀岡市広報プロモーション課が制作したショートフィルム「アートでつながるあなたとわたし」（約3分間）を会期中上映しました。

パンフレット

「障がい」が特別なものではなく、皆一人一人が違う個性のようなものではないかという思いを形にして、パンフレットのイラストは、様々な髪の色や肌の色の人たちが集い、明るく柔らかな雰囲気に。

10/15-25 2022

みんなで紡ぐドレス展

7月24日に開催した「やさいtoアート」ワークショップで、子どもたちが色とりどりに描き完成させた7メートルの布を使って仕立てた3着のワンピースドレスに、たくさんの方々が開かれたアトリエで装飾し、「みんなで紡ぐドレス」ができました。

やさいtoアート ワークショップ

7月24日に「やさいtoアート」ワークショップを開催。亀岡市内のオーガニック農家さんが20種類以上の有機野菜を収穫して、葉やツルなどの部分や土がついたままの野菜を持ってきてくれて、開かれたアトリエ中央を囲んで並べられました。

子どもたちは、野菜の周りを歩きながら、有機農家さんによる野菜の説明を聞いたり、野菜に触ったり、野菜を切って断面図を見たり、潰してみたり、それぞれ自由に野菜を観察しました。

そして、初めて見た野菜に対面したときのワクワク感や、野菜を触ったときの感触、叩いたときの音などを絵の具を使って色で表現することに挑戦。全長7メートルの布の上で、足に絵の具をつけて描いたり、ペタペタと手型をつけたり、霧吹きで色水を作ったりと、子どもたちはそれぞれ好きな方法で布に描きました。

作品の展示

1着目には、高齢福祉課の協力のもと、老人クラブの皆さんや、開かれたアトリエに集う皆さんにより刺繍をしてもらい、野菜の柄のワンピースドレスができました。

2着目には、シフォン生地のスカートに、切り絵サークル「向日葵」の皆さんが切り絵で装飾してくださり、花柄のレースのようなスカートのワンピースドレスができました。

3着目には、展示期間中に開かれたアトリエを訪れた方々（主に子どもたち）が、自由に装飾して、日々更新されるワンピースドレスとなりました。ドレスの横に、ドレスを装飾するアクセサリーが工作できるコーナーを設置し、会期中に訪れた子どもたちがプラバンを中心にビーズやシール、ハギレなどを組み合わせてアクセサリーも作りました。

ワークショップ

10月16日に「みんなで紡いでドレスをつくろう」ワークショップを開催し、子どもたちが好きな食べものやキャラクター、動物などをプラバンに描き、ドレスを飾りました。糸にビーズとプラバンを通したブレスレットのような作品やキラキラのシールを貼った、とても可愛いアクセサリーができあがりました。

▲モデル：豊田光　ヘアメイク：安藤満美　撮影：小檜山貴裕

展示コーナー

刺繍をされた野菜柄のドレスと、切り絵で装飾された花のレースのドレスは、アトリエ中央部に設置された木で組まれた空間の中を、宙に浮いているように吊り下げて展示しました。 空間の外側には、「やさいtoアート」のワークショップの子どもたちの写真を、内側には、同ワークショップでオーガニック農家さんに持ってきていただいた様々な有機野菜の写真を展示しました。刺繍や切り絵をしてくださった皆さんのポラロイド写真は中央に吊り下げて展示しました。

もし、開かれたアトリエで結婚式をしたら

皆で紡いだドレスの物語を冊子にし、開かれたアトリエに高砂テーブルとともに展示しました。開かれたアトリエに集い、一緒に紡いだ時間や思いが、これから次へ続く物語となるよう、地域のひとが地域のものを持ち寄り、集まってお祝いをするという新しい結婚式の提案です。

1/20-2/2 2023

10代のSDGs展

「2030年、今10代の私たちは20代半ばとなり、社会人として地球で起こることに責任を持つ立場となっています。2030年に、SDGs〜持続可能な開発目標〜を達成し、よりよい社会となっているように、10代のわたしたちができることを考えます。」ンバ真陽佳さんは、自身の海外での経験を生かしながら、世界中の高校生にSDGsについてアンケートをとりました。
レポートは、それぞれの国の状況や文化によって、抱えている課題はそれぞれであり、まず自分たちは何ができるのかを、改めて考えるきっかけとなりました。また、車椅子で活動する4人組バンド Wheel Chair Boysも、自分たちが身近にできる取り組みを考え、発表しました。

展示

ンバ 真陽佳さん

小中学生時代を亀岡と赤道ギニア共和国を行き来しながら過ごし、現在は日本の高校に通いながらJCIジャパングローバルユース国連大使として活動しています。本展では、ンバさんのSDGsの活動レポート・赤道ギニアの暮らしの紹介・赤道ギニアでのSDGsの活動中の動画（TEG Campus）の上映をしました。

1月27日には、開かれたアトリエ内のアトリエカフェで、赤道ギニアの人気家庭料理「ピーナッツバタースープ」（ンバさんのお母様監修）を日替わりランチとして提供し、当日は長蛇の列ができました。

Wheel Chair Boys

Wheel Chair Boys は、車椅子の男性4人組（関本泰輝さん（ボーカル）、関本紘輝さん（マラカス）、吉田琉星さん（ギター）、八木嘉恒さん（サウンドプログラム））の音楽バンドです。

本展では、車椅子で生活している彼らの視点で見たSDGsについて、自分たちにできることや気づいたことを文章にし、パネルで展示しました。

イベント
10代のSDGs ~それぞれの視点~

1月28日にはトークと音楽ライブも開催。

TALK

ンバ 真陽佳さんが「SDGsを通して、世界の高校生と国際交流」をテーマに講演しました。これまで世界中の高校生にとったアンケートや、研修先で訪れたインドネシアで経験したこと、赤道ギニアでの活動や、世界と日本の学生の考え方の比較など、実際に経験したからこそ見える興味深い内容でした。

講演後は、桂川市長・亀岡市SDGsアドバイザーの高木 超さん・ンバ 真陽佳さん・かめおか霧の芸術祭プランナーのキモトユウコの4人でのSDGsトークセッションを開催。登壇者4人それぞれの視点（市長として・SDGs有識者として・高校生として・アーティストとして）を交えて、これからの亀岡～日本～世界について聞くことができました。

LIVE

この日はWheel Chair Boysのライブも開催。人気のカバー曲の他、ボーカルTAIKIさんのオリジナルソング「My Self」も演奏され、来場した皆がWheel Chair Boysの音楽に感動した時間となりました。

12/14 2022

FORMS + FEELINGS

4年前に亀岡で滞在制作をしていた、ブラジル生まれのルアンことLuan Banzaiと、スイス生まれのノエミことNoémie Creux。イラストや映像などの、各国でさまざまな制作をしている2人が久しぶりに亀岡に帰ってきて、1日限りの展覧会を開催しました。

作品の展示・イベント

今回は特別企画として、両アーティストの最新作と、色の組み合わせ、自由な表現、出会い、そして感情など、日本での経験と世界中を旅した経験から影響を受けたライブペインティング作品を組み合わせて展覧会を実施。当日はライブペイントをしたり参加型ワークショップをしたり、短い時間でしたが参加者と濃密な時間を過ごしました。

ノエミ（Noémie Creux）
ジュネーブを拠点とするフリーランスのイラストレーター兼グラフィック デザイナー。

ルアン（Luan Banzai）
ブラジル出身のビジュアルアーティスト兼映画製作者。

COLUMN

HOZUBAG

「KAMEOKA FLY BAG Project」から生まれたHOZUBAGも工場を構えて3年目。
かめおか霧の芸術祭のメンバーに、エコバッグをデザインできないかと相談があり「エコバッグに使える素材やそれを作る人材は亀岡市内にもあるのではないか」と薪ストーブの前で話していたことが思い出されます。その後、パラグライダーを再利用するというビッグアイデアも加わり、大反響だったワークショップを経て、亀岡市とともに商品化するための工場を整備しました。

文章にすると数行にまとまってしまうけれど、過程には本当にたくさんの人のアイデアや経験、技術や期待が積み重ねられています。そのような追い風を受けて、このプロジェクトは国立新美術館で開催された「ファッション イン ジャパン 1945-2020 —流行と社会」で紹介されるなど、国内外で注目される存在になりました。

〈 銀座ロフトでの販売の様子 〉

亀岡市千歳町に整備したファクトリー「HOZUBAG Mfg.（ホズバッグ マニュファクチャリング）」では廃棄されるものが作り手の視点と、ここで働くメンバーの手作業によって新たなプロダクトに生まれ変わります。この「手作業」というところが隠れた魅力ポイントです。
パラグライダーは全て同じ作りをしておらず、少しずつサイズや仕様が異なります。それを工具やハサミを使って、パーツを取り外し、魚をおろすように解体しています。この作業は特殊技術ではありません。時間はかかりますが焦らずに続ければ解体できます。そしてパラグライダー生地にハサミを走らせた時のその感触がとてもグッドです。これは野菜をまな板の上で切っているときの気分に似たものです。

〈 現在の工場で解体と裁断をしている様子 〉

解体した機体の生地はロータリーカッターと定規を使って裁断します。また機体についたバラコードも結び目を解きながら分類します。どれもが時間のかかる作業ですが、ひきたての豆でいれるドリップコーヒーを好むように、その手間のかかる時間に私自身は癒されケアされているような気分になります。

HOZUBAG Mfg.は様々な人が作ることに携わり、手を動かすことから生まれる健やかな場を目指しています。手を動かし、その素材のおもしろさや魅力を発掘し、それらがこれからのものづくりを支えられたら良いなと思います。

HOZUBAG Mfg. 工場長　武田幸子

〈 キリカフェの畑のために作ったタープ 〉

図書コーナー

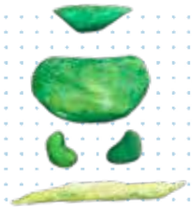
開かれたアトリエの本棚は亀岡市立図書館の協力のもと、季節の変化に応じてテーマを決めて選書を入れ替え、本との新しい出会いの場をつくっています。

今年は　冬から春　「豆」
　　春から夏　「石」
　　秋から冬　「祭」
　　冬から春　「温」

にまつわる選書や、それに伴う催しを行いました。

豆

亀岡に3店舗ある豆腐屋さんを調査し、開かれたアトリエのアトリエカフェに協力していただき、それぞれの豆腐屋さんの豆腐を食べ比べできる豆腐定食をランチメニューとして提供しました。
（宮崎の郷土料理　冷や汁形式で）



石

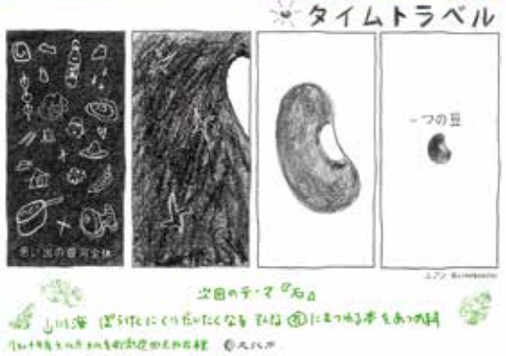
亀岡市文化資料館の企画展「妖怪」に合わせて美術家の伊達伸明さんとともに川の石を妖怪に見立てる、妖怪石探しツアーを開催。その後参加したこどもや大人に妖怪を描いてもらい、見つけた妖怪を共有して楽しみました。

祭

年の始まりに意図せぬところで本との出会いが生まれる、本の言葉に出会うことができる本みくじとアーティストのSAYAHANAさんによる本占い（本の一説から占いをするというパフォーマンス ）を行いました。

温

生命を尊ぶ春分の日に市役所の庭の植物を観察、採集して和紙と草でランプを作りました。



暮らしを耕すプロジェクト

かめおか霧の芸術祭は一般的な“芸術祭”ではありません。作品だけが芸術ではなく、先人の知恵や職人の技や、畑の美しい風景など、形のないものや日々の暮らしを豊かにしてくれるものも芸術として捉えています。

こうした日々の暮らしの営みや生活そのものを耕し、暮らしを豊かにしていく取り組みを年間を通して行っています。

例えば先人の知恵や職人の技を学ぶワークショップ形式の講座「KIRI² 芸術大学」や、対談やトークを通して智慧を学ぶ「KIRI WISDOM」、子どもたちの想像力と創造力を育む「こどもみんげい」、人・モノ・食を軸に地域に新たな循環を生み出す「ボンボンマルシェ」など、市民の暮らしを耕し、豊かさを育む活動（プロジェクト）を数多く行っています。

暮らしを耕すプロジェクト

1 城跡芸術展 …… P36
2 KIRI² 芸術大学 …… P38
3 こどもみんげい …… P42
4 ボンボンマルシェ …… P48
5 KIRI WISDOM …… P52
6 アートコミュニケーター養成講座 …… P54
7 KIRI FARM …… P58
8 アート×環境 …… P60
9 アート×農林 …… P64
10 アート×教育 …… P68
11 霧芸×京都信用金庫 …… P72
12 霧芸×資源循環 …… P78

Project 1

城跡芸術展

亀岡ゆかりの芸術家による展覧会

かめおか霧の芸術祭では、歴史と文化が折り重なる丹波亀山城跡（大本本部）を舞台に、亀岡ゆかりの芸術家による展覧会を2020年から毎年開催しています。若手作家から大御所まで、絵画や陶器、漆器、インスタレーションなどさまざまな作品を一堂に楽しむことが出来る希有な展覧会です。
水面に映る城壁や、植物園の小道にさす木漏れ日、赤松の林の黒い影。まるで城跡そのものが作品であるかのような会場は、一つの文化的聖地となっています。
2022年には「城跡芸術展」として新たな名称となり、展示会場が屋内だけでなく大本花明山植物園（日本の在来種を中心に約1000種類もの植物が栽培、保護されている植物園）や松林、中庭、広場など屋外へも広がりました。
毎年展覧会を開催する中で亀岡にゆかりのある多様な芸術家の交流の場としても機能しており、2022年からはボランティアサポーターも参加し、新たな交流や体験が生まれています。

出展作品や詳しい情報は城跡芸術展Archive Bookをご覧ください。

Project 2 KIRI² 芸術大学

“暮らしを輝かせる”知恵や技を学ぼう！

亀岡には画家や陶芸家といった芸術家だけでなく鍛冶師や船頭など、伝統や文化を受け継ぐ多彩な人が暮らしています。亀岡の豊かな自然に魅了され、文化的な活動を行っている人々を講師に招き、暮らしを輝かせる“知恵”や“技”を学ぶワークショップ形式の講座を「KIRI² 芸術大学（きりきりげいじゅつだいがく）」と称して、年間を通して開催しています。

2022年度は「生きる智慧」をテーマに、季節に合わせた企画や「音」「食」「植物」など、毎回違ったテーマを設定しながら企画してきました。火・水・土・風・植物…身の回りのものごとに注目しなおすことで、人間本来の感覚や想像力を呼び覚ましていく、そんな講座を数多く実施しました。

2022年度から「学生証」も作成。
智慧が増えていくのを可視化して、
リピートにも繋げています。

多彩な講師陣が好奇心をくすぐる講座を展開

八太栄里
（美術家）

松本大督
（ガラス作家）

森太三
（美術家）

山成研究所
（創作作家）

山見拓
（エコライフメイカー）

米谷健＋ジュリア
（芸術家）

澤田徹
（大本花明山植物園）

加納俊輔
（芸術家）

山本洋子
（カオヤム山羊草）

キモトユウコ
（アーティスト）

HOZUBAG Mfg.
（アップサイクルファクトリー）

吉田欣司
（木工作家）

生松ひろみ
（主婦）

LIST

日付	講座名	講師	場所
5/21	路上観察部 08	八太栄里	開かれたアトリエ
7/24	夏を涼しく過ごすための風鈴づくり Vol.1	松本大督	Glass Studio Calore
7/30	夏を涼しく過ごすための風鈴づくり Vol.2	松本大督	古民家つぐみ
8/1	木のフレームから自由に発想して工作しよう 夏休み工作相談室	森太三と山成研究所	亀岡市旭町自治会
9/17	自転車で発電！太陽光で調理 アートハウスで体感する小さな自給	山見拓 / 米谷健＋ジュリア	アートハウス「夢」 ※中止
10/16	植物標本をつくろう！&植物園ガイドツアー	澤田徹	大本花明山植物園
10/22	「要らない写真」を持って外に出よう	加納俊輔	大本みろく会館
11/26	五味五色　タイ料理で食べる楽しみに出会おう	カオヤム山羊草	KIRI CAFE
11/27	大切なものを、そっと置きたくなるコースターづくり	キモトユウコ	開かれたアトリエ
2/10,17,18	HOZUBAGのハギレからカバンを作ろう	HOZUBAG Mfg.	HOZUBAG Mfg. 工場
2/12	黙々と木を彫り作る 板皿づくり	吉田欣司	開かれたアトリエ
2/25	おかあさんと作る初めての味噌づくり	生松ひろみ	KIRI CAFE

Project 3

こどもみんげい

こどもたちや、親、そして
この活動を支える作家たちが
話し合い、一緒につくっていく
プロジェクト

みんげいってなんでしょうか。
お金持ちが楽しむ芸術ではなく、民衆の芸術活動です。つくるものは器だけではありません。笛かもしれないし、野菜かもしれません。そして、完成したものを世の中に送り届け、使ってもらう。
そのことで全国各地にこどもみんげいの仲間を増やしていく。未来を一緒につくる仲間を増やしていく。そんな循環や環境をつくっていきたいと考えています。

2021年、2022年度は亀岡の野菜を型取り、器（?）をつくりました。そしてその器（?）でお披露目会、食事会を開催しました。

たいせつにしていること

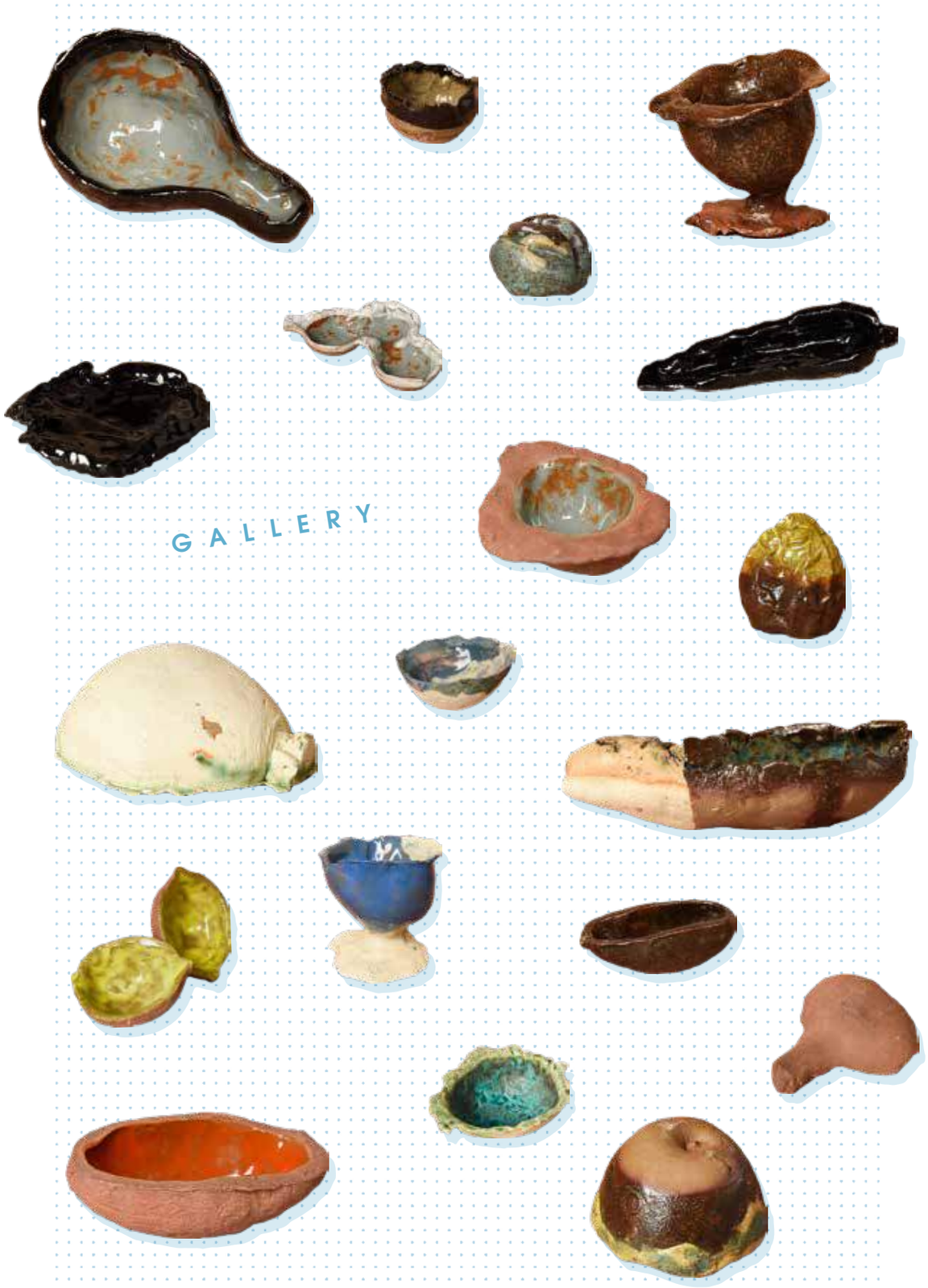
こどもみんげいは、ものづくりの
ワークショップではありません。

なにがつくりたいのか
なぜこのように考えたのか
それぞれの視点を大切に
考えて、話して、つくっていく
その場を一緒につくる人たちの考えを
大切にしています。

こどもみんげいのモノづくりは
授業ではありません。

つくらないといけないものもありません。
途中で興味が移り、虫をとったり、
走り回ったりすることもあるでしょう。
ここにいるこどもたちと友達になったり、
いろんな大人を見たり、
話を聞いたりするのもいいでしょう。

こどもみんげいは、
いろんな人や自然と一緒に
試行錯誤する中で生まれる発見や、
疑問を大切にして活動しています。



COLUMN

小屋の本

『小屋の立ち姿に見惚れる』

縁あって亀岡に移り住み、6年が経とうとしている。そんな中ずっと気になっていることがある。それは農地にぽつんと立つ農機具小屋。亀岡から京都市内に走る電車から外の田んぼを眺めていると、農作業をせっせと頑張る農家さんや、朝日に光る小屋が見える。

そんな小屋について調査が始まったのは4年前。芸術祭での様々な出会いから、趣味の合う友人ヤマサキくんと、大阪で設計やものづくりを行う安川さん、冨吉さんと小屋について考えていくことになったのである。初めは興味本位から始まり、仕事の合間をぬって、まずは亀岡にどのくらい小屋があるのか写真を撮りながら調べることにした。

まずはよく見かける小屋の近くまで行き、あとは歩いて辺りをまわる。遠くで見ていた小屋は、近づくにつれてどんどん印象が変わってくるのに驚いた。
「こんな建て方していたんだ。」
「雨水を貯める仕組みが美しい！」
小屋の細部にもどんどん目が行くようになっていった。

写真を撮るにしても、どの角度からがかっこいいかな。など気になり出し
「日差しが夕日の方が綺麗かもしれないから、夕方にまた来よう。」
「この小屋は田んぼに水が張られている時の方がかっこいいんじゃないかな。」
・・・
自然と共にある小屋の姿を目の当たりにした私は、小屋を単なる建物として見れなくなってきたのである。

調査が楽しくて仕方がなくなった私は、それからというもの時間をつくっては山沿いに行ったり川沿いに行ったり、細い道もくまなくまわり、毎回のように新しい発見をした。小屋の形から細かなディテール、立っているロケーションも全然違う。それぞれ試行錯誤されてつくられた小屋は”人となり”がにじみ出ているからなのか、立ち姿がまるで人のようで、生き物のように見えるようになっていた。

亀岡全土をまわり、ある程度は見に行ったと思うが未だに発見する小屋もある。

その調査があまりに楽しく、発見も多かったので「小屋の本―霧のまち亀岡からみる風景」という本をメンバー共著で出版した。
日本全国いろんな地域からも反響があり、様々な読者に出会うことができた。この美しい風景を共有できた喜びはおおきい。

農作業は、日々行われている。その暮らしや作業と共にあるのが農機具小屋なのである。小屋は日に日に変化し、その時の用途によって姿を変える。最近は農家さんの減少や圃場整備などで小屋の姿も減ってきたのが寂しいが、やっぱり小屋の立ち姿は美しい。

そんな小屋の探求はこれからもますます続いていくのである。

辰巳雄基

小屋の本について
詳しくはこちらから

Project 4

地域に新たな循環を生み出す

ボンボンマルシェ

ボンボンマルシェは、亀岡市内のモノ・ヒト・食の「循環」をコンセプトに、地域に新たな価値を生み出し、愛着の湧く日々をつくるマルシェです。
モノの売り買いを第一の目的とせずに、誰かの不用品を次の必要な人へ繋げたり、壊れたモノを直したり、地域の旬の食材を味わったり、そんなことを目的に地域に新しい”循環”を創出しています。

モノの循環

「めぐる環（わ）　物々交換市」

誰かの使わないものを誰かの使うものに活用する『めぐる環 物々交換市』。家に眠っている雑貨やおもちゃ、本＆絵本、小型家電など、まだまだ使えるものを持ち寄り、気に入ったものがあれば持ち帰ることもできます。

食の循環

「おいしい・うれしい Bon Marche」

地域の旬の農産物をその地域で食し、季節を味わう、そんな本来当たり前の「幸せ」と「亀岡の豊かさ」を感じる食の循環。”地産地消”や”持続可能な食”のあり方など、身近なSDGsを美味しく楽しく学びます。

修理・おなおし

「いとしうれしおなおし」

暮らしの中で使用しているものを、壊れても直して大切に使っていく修理＆お直しの「いとしうれしおなおし」。穴が空いたり破けてしまった椅子のカバーの張り替えや、着なくなった洋服をリメイク、アップサイクルさせたりして、モノを大切にしていく心を育みます。

知恵・技の循環

「体験・ワークショップ」

芸術家やアーティスト、はたまた先人や職人の知恵や技を学びながら、暮らしに役立つスキルを身に付けていく知恵と技の循環。亀岡の風土や歴史も学びながら、毎日の暮らしを豊かに生きるヒントを散りばめています。

8/21 2022

ボンボンマルシェ Vol.4 ~2022 夏~

夏真っ盛りの８月、第４回目となる「ボンボンマルシェ Vol.4　~2022 夏編~」のテーマは「モノ」と「食」の循環。この日は「開かれたアトリエ」だけでなく「市民ホール」も会場に加わり拡大版として開催。市の環境政策課・資源循環推進課と連携をした『めぐる環（わ）物々交換市』やみずのき美術館との合同企画として、画材の循環『巡り堂』を初開催しました。

会場：亀岡市役所１階 市民ホール、地下１階 開かれたアトリエ

2/26 2023

ボンボンマルシェ Vol.6 ~2023 冬~

第６回目は、亀岡市役所１階のエントランスホールで『めぐる環 物々交換市』、市民ホールで『体験・ワークショップ』、地下１階 開かれたアトリエで食の循環『おいしいうれしいBon Marche』を実施。今回、食のテーマに据えたのは、冬の果実の代名詞「亀岡産のイチゴ」。各出店者さんがこの日のために独自のメニューを考案し、１日限りの限定メニューを用意してくれました。

会場：亀岡市役所１階 市民ホール、エントランスホール、
地下１階 開かれたアトリエ

10/23 2022

ボンボンマルシェ Vol.5 ~2022 秋 @城跡芸術展~

今回のボンボンマルシェは、同期間に丹波亀山城跡（大本本部）を会場に開催していた「城跡芸術展」に合わせて、初めて野外で開催しました。この日の目玉は亀岡の「手づくり＝ハンドクラフト」を集めた『ボンボンクラフトマーケット』。亀岡で活動する作家やアーティストなど23組が参加。そのほか亀岡の旬の食を集めた『おいしいうれしいBon Marche』や『うれしたのしおなおし』、作家のアトリエから出た廃材を使ったワークショップなども行い、晴れ渡る秋空の下で多くの人で賑わいました。

会場：丹波亀山城跡（大本本部）中庭

Project 5

9/11 2022

アレックス・カーが怒り愛する日本

数年オンラインで開催してきたトークイベント「KIRI WISDOM」。今までさまざまなゲストと共に、農業やアート、建築、福祉、ものづくり、デザインなどの視点から、身近なものや、暮らしの中を見つめ直し、生き方のヒントとなる知恵や物語を話し合ってきました。

今回は久しぶりの対面での開催ということで、トークイベントの意味や意義を考え、五感に働きかけるスペシャルな会として、食事付きのサロンを開催。芸術祭の拠点であるKIRI CAFEのすぐ横にある素晴らしい建物、空間、歴史ある武家屋敷「毘沙門荘」を活用しながら、アレックス・カー氏をゲストに、日本の未来について座談会を行いました。

日本とタイ・バンコクに拠点を置きながら、全国各地で古民家の改修や再生・活用を行い、また後世に生かすべき文化を発信し続けているアレックス・カー氏。「日本中の駅前が「便利」「効率」というかけ声で画一化されたからこそ、不便さが大きな価値になる。改めて地元にある価値あるものを見直し、愛していくべきだ」と話すアレックス氏。実はアレックス氏、亀岡に住居を構えており、この「毘沙門荘」も古くから関わりがある想い入れのある場所なのです。

アレックス・カー インタビュー

アレックス・カー 毘沙門荘 案内

KIRI WISDOM

この空間がまた新たな形で使われていくことを願って、さまざまな方々との話し合いが始まりました。料理人には山フーズこと小桧山聡子さんをゲストに、地域を練り歩き、食材を探し、旬の食材や近郊のものを使って、料理を提供いただきました。近くで自然派ワインを販売するVinogradさんにも来ていただくなど食材と人、建物が響き合う素晴らしい夜になりました。

ゲスト:アレックス・カー
聞き手:松井利夫
交流会の料理人:小桧山聡子(山フーズ)
岩橋勇歩(実生)
交流会のお酒:Vinograd、Hino Brewing

登壇者

●Alex Kerr
アレックス カー
東洋文化研究者
1952年アメリカで生まれ、1964年に初来日。エール、オックスフォード両大学で日本学と中国学を専攻。1973年に徳島県東祖谷で茅葺き屋根の民家(屋号=ちいおり)を購入。1977年から京都府亀岡市に在住し、篠庵有限会社を設立し、執筆、講演、コンサルティング等を開始。その後古民家の利活用企画のプロデュースを中心に取り組む。1993年、著書『美しき日本の残像』(新潮社刊)が外国人初の新潮学芸賞を受賞。2001年には『犬と鬼』(講談社刊)を執筆し、日本が抱える「文化の病」を取り上げ、注目を浴びる。2005年に徳島県三好市祖谷でNPO法人篠庵トラストを共同で設立。2019年『観光亡国論』(中央公論新社)を共著で執筆。2020年『ニッポン巡礼』(集英社)、2021年 タイ バンコクの文化や歴史について書いた『Another Bangkok』を執筆。
現在は、執筆、講演を中心に地域活性化や景観計画、観光適正化等の提言を行っている。

料理人

●小桧山聡子
山フーズ主宰/料理家
1980年東京生まれ。
多摩美術大学卒業。「食とそのまわり」にある、もの・こと・感覚などをすくい上げ、考察・研究・創作・提案し、様々な形でみなさまの身体へお届けすることを生業としている。ケータリング、ワークショップ、商品開発、講師など多岐にわたって活動。「食べるってなんだろう」「おいしいってなんだろう」そして「生きているってなんだろう」をさまざまな形で探求しています。

Project 6 アートコミュニケーター養成講座

“アートで暮らしを耕す”市民参加型の講座がスタート

かめおか霧の芸術祭では、市民と一緒に「暮らしを耕す芸術祭」をつくる、市民参加型の「アートコミュニケーター」講座を始めました。アートの実践、農の実践を通して、芸術祭やまちを一緒につくる人材を培います。

かめおか霧の芸術祭って？　アートってなに？　暮らしを耕すってどういうこと？　定期的に畑に集まって作業をしたり、ゲストを招いた座談会を開いたりしながら身体や頭で考えていきます。「!」や「?」を大切に、気づきや発見をする旅に出ます。次世代をつくっていくメンバーと共に、種をまいていきましょう。

11/30　2022

Vol.1

松井利夫（陶芸家）かめおか霧の芸術祭総合プロデューサー

「半農半陶 - 冬の仕事 / 夏の仕事」

（辰巳）始まりとして、ボランティアで集まってくださった皆さんが定期的に話したり、どんどん仲良くなれたり、そういう人たちの集まれる場をつくりたいなという話からこの講座が生まれました。ただ講座を開いて、いろんな人を呼んで話を聞くという一方的なことにしたくなくて、畑作業は絶対にセットにしたくて、KIRI CAFEでちょうど畑を借たので、そこで動いていけたらいいなというようなことで始まっています。まずは松井利夫さんの話から聞きたいなと。この芸術祭がどういうものでどう進んでいったらいいのかっていうのも、みんなと話していけたらいいなと思っています。

一番初めに会ったのは農家さん

（松井）霧の芸術祭を始めるにあたって一番初めにお会いしたのが、アーティストじゃなくて亀岡に住んでる農家さんだったんです。亀岡はオーガニック野菜を栽培している若手就農者の方とかがたくさんいたんで、そういう話を聞いてみたいなと。

芸術祭の基本的なコンセプトは「芸術と農業」なんです。土をつくるように、芸術の土づくりをしないと。もう一度土づくりから芸術をやり直すということで、初めにお呼びしたのは７人ぐらいの農家さんやったかな。いろんなタイプのね、慣行農法の人もいるし無農薬の人もいるし。
そのときの話で忘れられへんのが、ある農家さんがなすびつくってて、全滅したんですって。全滅して、もう全然あかんかって。どうしようかと思いましたわって。せやけどなんとか拾てくれる人がおって。それはどこ行ったのと言ったら、何とかさんとこでアルバイトで雇てもらって飢えをしのいだっていって。「そこはね、無農薬でやってんの？」言うたら「いや、バンバン農薬使てます」って言って。そうなんや思て。自分とこの農法と全然違っても組むことができるんやって。ポリシーどこにあんねんみたいな。
でもそれは、むしろたくましさの象徴やなと思って。やっぱりほんとに食ってかなあかんてなったら、それはもう農薬使てたかって何したかって自分は食ってかなあかんねんから。家族も養わなあかんやろしね。それが芸術の場合は、そうはしない。だいたいね。もう、一つポリシー決めたら絶対それでやっていくっていうことができる世界があるわけですよ。生死に関わりないですからね。
それを見たときに、僕はやっぱりどっちも大事なんかなと思ったら、そういう農家的な取り組みの方法、生き方っていうことを、ある種自分の主義に反するようなことも受け入れて次の１歩のために矛盾を受け入れるということのほうが、リアリティがあるなと思ったの。その上で将来、純粋にどんどん自分を研ぎ澄ませていったらいいかもしれないけれども、しょっぱなから純粋では絶対いけないなと思ったんですね。

「ザ・サイネンショー」で出会う焼き物の姿

（松井）サイネンショーはね、家で陶器っていっぱい余ってるやないですか。捨てるに捨てられへんかったりするでしょ。そういう困ってはる人がいっぱいおって、要らない人くださいっていうと皆喜んでくれるんです。それを集めてきて、穴窯ってわかります？　薪で炊くやつ。普通はだいたい1200℃ぐらいで焼くものを1300℃ぐらいに温度上げてやると、すごい溶けてベロベロなったりとか。すごいきれいになるんです。これは灰がかぶって、白いお皿のとこにこういうグリーンの釉薬が、自然の灰が付くんです。これもどっかの安もんの皿なんですけどね。こっちは汚れたから後で金を塗ったんです。こういうものができてくるんですよ。

今ちょうど秋田で展覧会をやってるんですけど、家に置いてる壺とか置物で要らんものをくださいって言ったら、ものすごい送られてきて。そういうものをいっぱい焼いたんですね。そうするとおもしろいのは、くれた人が自分の焼いたものを見に来てくれるわけ。それで見て、こんなんなるんやったら私買ってくわ言うて、捨てたものを買ってくんです。自分が捨てたものをまた自分が買うてく。すごいおもしろいなと思って。置物で干支なんかでもね、来年ウサギやのにイヌの置物くれたおばさんがおって。それがまたきれいに焼き上がってるん見て「来年イヌにする!」て、それ買ってくんですよ。
すごい不思議なことが起こってて。サイネンショーというのはそういうことをやってるんです。

僕も想像はできるんだけども実際焼いてみるとね、また違うんですよ。だから、まだ見たことない焼き物の姿がそこにはあって。そのために釜を炊いてるみたいなんですね。これは僕今日のテーマになると思ってんですけども、畑と一緒で。

今こういう話をしたら、たぶんこの中の１人か２人は「私もやりたい」「穴窯今度いつ焼くんですか」って、おるやんそういう人が。ほんでそういう人が来るわけ。その人らと一緒に釜詰めして。釜の詰め方全部教えますから、一緒にして、一緒に炊くんですよ。
８時間交代で３チームつくって。それで交代していくんだけど、どうしても夜中に当たる。だいたい夜10時から翌朝６時の当番とかね。そこが素人だけになっちゃうときがあるんです。素人だけになると薪のくべ方とか教えてても温度がどんどん下がってったりとかね。いろいろあるんだけど、そういうことも全部もうよろし。任せるっていうので、僕らも寝るんです。でも寝ると、案の定温度下がっていきよる。次慌てて、僕らがどんどん上げてく。そういうことするとね、絶対あり得ない釜のグラフが生まれるんです。釜の温度上昇。それはどんな陶芸家もまず定説からは外れてるんで、そういうやり方はしない。でも、定説から外れてるとこに宝がある可能性があると思ってんのが僕らで。案外そういうときにすごいおもしろいものが生まれたりするんですよ。だから、素人の力は怖いっていうか。

多様な関係性の中で生まれる芸術祭

（松井）それが、僕今ここの畑でもそういうことが起こってくるんじゃないかなと思ってて。だから、霧の芸術祭もやっぱりそういうことで。結局、すごいプロデュース能力ある人やアーティストがこれを全部進めていくっていうことではなくって、今ここに来てるいろんな人、ボランティアで手伝ってくれる人たちや、学生で卒業したてとかあるいはまだ学生もいるよね。そういう人たちでつくっていったら、絶対にそういういろんな不可抗力が起こってきて、普通の芸術祭ではないもんが生まれると思ってこれをやっているんです。僕はそれをすごい期待してるんですね。

（松井）……松井利夫
（辰巳）……辰巳雄基

1 2
3 4

1/11 2023

Vol.2

米谷 健+ジュリア アートユニット コンテンポラリーアーティスト（現代美術家）及び百姓（無農薬農家）＝ライスバレー

アートと農業とエネルギー
「アーティストと農家を
行ったり来たりする暮らしや葛藤を学ぶ」

隣町でアーティストと農業を生業にする米谷さん。10代、20代、30代…と2人は何をして人生を歩んできたのか。2人の過去を振り返りながら、なぜ今アーティストをしているのか？　どうして農家になったのかを聞きました。世界情勢や環境の変化、そして自分たち自身の身体の変化など、マクロからミクロの話に参加者は自分の人生も振り返りながら2人の活動を改めて理解しました。

2/15 2023

Vol.3

吉村 静 ランナー / アーティスト

リバースカルチャーショック
「カナダに住みながら
国々を旅して知る世界と、
日本に帰って見える世界を学ぶ」

4年前亀岡で一緒に芸術祭をつくってきた吉村さん。カナダのバンクーバーでの生活やユーコンで通っていたアートスクールの話しをしてもらいながら、日本とカナダの違い、吉村さんが感じる"今"について話を聞きました。なぜ日本に帰ってきたのか。これからどうするのか。旅をしながらミニマルに、不安定だけど自由に国や活動を横断する彼女の言葉を聞き、私たちの"今"を考えました。

1 2
3 4

2/8 2023

Vol.4

鈴木健太郎 移動八百屋369商店店主/一般社団法人京都オーガニックアクション代表理事。

都市と農村
「都市と農村、食と農の
新たな関係づくりを学ぶ」

隣町で移動八百屋を営む鈴木さん。開業するにあたりどんな考えがあったのか、また、オーガニック農産物の共同物流便をなぜ始めたのかを中心に話を聞きました。野菜のおいしさや農家の考えていることを伝えたい。という想いから、農村と都市との連携の構築。地道な活動から生まれた人間関係や、連携にともなうハイテクな技術の重要性をまじまじと学びました。

2/22 2023

Vol.5

山城大督 美術家・映像作家　Twelve Inc. 代表取締役

アートの変化
「地域での多彩なプロジェクトと、
アート像の変化を学ぶ」

亀岡にルーツがある山城さん。映像というメディアを活用してさまざまな地域で活動を展開する山城さんに、なぜそのような表現方法に至っているか。現場でどのような出会いや発見があったのかを深く深く聞き出しました。山口県での活動や亀岡での作品制作を例に、風景や人と出会い、そこで感じた場面をありありと伝えてもらうことで、新しい"出会い方"を教わりました。

Project 7

KIRI FARM

毎月第三日曜は「まなびの時間」

有機農家であり、農をきっかけにした場づくりを仕掛ける、ひら自然菜園の加地玄太氏を講師に招き、頭を耕す日を設けました。12月「土のはなし」、1月「タネのはなし」、2月「野菜のはなし」。それぞれのテーマで深掘りし、土の中の不思議や作物の歴史など、壮大なことから作付けスケジュールを一緒に考えるといった具体的なことまで、毎回新鮮な学びを重ねています。実際に畑にでて、WSの時間も設けています。

3/1–12 2023

KIRI FARMの種蒔き展

亀岡市役所 地下1階 [開かれたアトリエ] にて、展覧会を開催。日々の活動を記した耕作日記や写真、松井利夫さんのインタビュー映像から、KIRIFARMメンバーが描いたイラストまで、幅のある展示を行いました。

市民と耕す畑とアート（と暮らしと自分）

2022年12月 亀岡市千歳町毘沙門にあるKIRI CAFE裏の畑にて「KIRI FARM 」は始まりました。農業でもなく、家庭菜園でもありません。"土を耕しつながりを耕すコミュニティ" として、毎週活動しています。畑をする、ということは当然地味な作業がつきもの。落ち葉を集める、草を刈る、土を運ぶ、小石を拾う、竹を切るなど、ひとりでやると何日もかかって「大変」なことも、みんなでやると「楽しい」に変わる。そして、ここでは教える側 / 教えられる側には分かれていません。手が集って、知恵が生まれ、たくましくなっていく。参加している方は、城跡芸術展で市民ボランティアをしていた方、毘沙門区のご近所さん、県外から遊びにきてくれる方などさまざま。「いつもの人」と「はじめての人」が入り交じり、新たな縁が生まれ、確かなつながりを育む場になっています。年齢不問、市内外不問、子ども同伴大歓迎！「KIRI FARM」は開かれたコミュニティとして、2023年度も引き続き活動していきます。

KIRI FARMの機関誌「土筆（つくし）」を創刊しました。

農（土）と 芸術（筆）という目線から、俯瞰的にKIRI FARMの活動を眺めるような冊子が完成しました。

毎週活動しています。
詳しい日程や活動内容
はこちら
instagram
@kiri.farm

Project 8

アート×環境

HOZUBAG Mfg.

アートが生み出す環境政策

かめおか霧の芸術祭では立ち上げ当初から「アート×環境」をテーマにした取り組みを積極的に進めてきました。その象徴的な存在が、廃棄されるパラグライダー生地をアップサイクルしてマイバッグへと生まれ変わらせた『HOZUBAG』。2019年に誕生した「KAMEOKA FLY BAG Project」から派生し、いまや全国的にも有名な取り組みとなっています。
そのほか、亀岡市環境政策課からの委託を受けて、保津川の環境保全に繋がる環境配慮型の飲食店に掲げる「リバーフレンドリーレストラン」や、無料で飲料水を提供する「給水スポット」に掲出するサインフラッグを、亀岡の藍染め工房「京都ほづ藍工房」とコラボして作成するなど、地域の産業とアートを組み合わせた新たなる価値の創造も行っています。

▲「リバーフレンドリーレストラン」、「給水スポット」サインフラッグ

HOZUBAG

HOZUBAG工場とはどんな施設？

HOZUBAGという名前は亀岡市の清流、保津川から名付けられました。川のように流れ続け、水のような自然な循環を生み出したいとの思いが込められています。
世界で約10万人以上の競技者がいるパラグライダーですが、飛ぶ役目を終えたパラグライダーの行き場はなく、保管しておくか廃棄するしかない状況です。
HOZUBAG Mfg.（ホズバッグ マニュファクチャリング）は厳しい安全基準によりリユース不可となったパラグライダーを回収、全て手作業で解体・裁断する拠点を亀岡市とともに整備し、再利用可能な資源を循環させています。

工場で行われる作業

全国各地のパラグライダースクールと連携し、工場に集められるパラグライダーは全長10～15mとサイズもバラバラです。それぞれ個体差のある機体から手作業で付属品を取り除き、ハサミを使って解体しています。
解体後の生地は工場内で洗浄し、バッグの型紙に合わせ、裁断しています。

ワークショップ

バッグを裁断する際にでる小さなハギレを縫い合わせ、大きなパッチワーク生地を工場で制作しています。ワークショップ用にデザインしたオリジナルバッグの形を参加者それぞれがハサミで切り出し、タグを縫いつけ自分だけのバッグを作ります。
HOZUBAGの制作工程を現場で体験できる機会を作りたいと思っています。

かめおか霧の芸術祭 × 環境

5/25–27 2022

霧芸 × 環境展2022

2022年5月に東京ビッグサイトで行われた『NEW環境展2022』に亀岡市が市の取り組みを発信するために出展しました。出展ブースを霧の芸術祭がプロデュース。木をつかった什器で全体を統一し、環境や自然に配慮した市の方針を再現しました。

場所：東京ビッグサイト（東京都港区）

6/6–16 2022

霧芸 × 資源循環推進課

亀岡市資源循環推進課では市民の家に眠っているまだまだ使えるリユース品の回収事業を行っています。この取り組みをより多くの市民に知ってもらうため、回収時に集まった品の一部を開かれたアトリエに展示しました。

場所：開かれたアトリエ

12/10,22 2022

キャンドルナイト2022

～冬至の夜に世界にひとつのキャンドルで彩りを～

12月22日は一年の中で最も昼の時間が短く夜の時間が長い日「冬至」です。この冬至の日に合わせて『電気を消してキャンドルを灯そう』を合言葉に、長い夜を楽しむための「キャンドルナイト2022」企画として、市民と一緒にキャンドルをつくる『世界に1つだけのアートキャンドルづくりワークショップ』と、つくったキャンドルをみんなで灯す『冬至の夜のオンラインキャンドルナイト』を開催しました。

世界に1つだけのアートキャンドルづくりワークショップ

日本キャンドルアーティストアワード2021のボタニカル部門で1位に輝いた経歴を持つ亀岡在住のキャンドルアーティストの谷口みゆきさんを講師にお招きして、世界に1つだけのキャンドルをつくるワークショップを開催しました。

冬至の夜のオンラインキャンドルナイト

冬至の夜により多くの市民の方々とオンラインで繋がりながらキャンドルを灯そうと企画した「オンラインキャンドルナイト」。キャンドルづくりワークショップの講師でもある谷口みゆきさんと亀岡市環境先進都市推進部長の山内剛さんもゲストにお招きして、ゆらめく光をみんなで眺めながらしばし癒やしの時間を共有しました。

Project 9

アート×農林

アートで農を耕す?!

かめおか霧の芸術祭では「農」を芸術として、また「農家」を芸術家として捉え、芸術祭の立ち上げ当初から『アート×農』の取り組みを継続的に行っています。2019年度に行った展覧会「素顔のかめおか」では、畑そのものが芸術という観点から『生ける野菜展』を開催。また2020年度には野菜の新しい販売方法を模索する移動販売用屋台『やおやおや』を制作し、畑や市役所などさまざまな場所で新しい野菜の販売の形を提案するなど、常に実験的な試みを行っています。

また、亀岡の農地に建つ農小屋をリサーチして1冊の本にまとめた『小屋の本』が芸術祭の取り組みから生まれたり、文章の書き方や取材の仕方を学んだ市民が、実際に農家を訪れて取材し、自ら文章を書いた冊子『農家に聞いたはなし』も発刊されました。種から芽が出て花が咲くように、農とアートの取り組みが市民を巻き込み、市民が自分ごととして暮らしを耕し、作品という形で実を結んでいます。こうした取り組み自体もかめおか霧の芸術祭が行っている特徴的な事例のひとつです。

▲ 小屋の本 霧のまち亀岡からみる風景

▲ 農家に聞いたはなし

9/16–18 2022

オーガニック ライフスタイルEXPO

全国でオーガニックに取り組む自治体や企業、団体等が一堂に会する日本有数のカンファレンス「オーガニックライフスタイルEXPO」に亀岡市として出展し、会場の演出をかめおか霧の芸術祭がプロデュースしました。会期中の18日には桂川市長が亀岡市の有機給食の取り組みをパネルディスカッションで発表しました。

場所：東京都立産業貿易センター
浜松町館（東京都港区）

こだわりすぎた収穫祭

なごみの里あさひプロジェクト

直売所のこれからのまちづくりを考えるモデルとして、亀岡市農林振興課の委託を受けて令和元年度から「なごみの里あさひ」を中心にした旭の未来に関するヒアリングや調査、またそれに応じてイベントなどの企画を実施してきました。

今回、旭町に住む約50人の皆さんにそれぞれお話を聞き、見えてきたさまざまな思いや提案を旭町民に共有するため、冊子「なごみの里あさひ10の提案」を制作しました。
この冊子がさまざまな年齢や考え方、立場の方が気軽に旭の未来について話し合うきっかけになるよう、引き続き未来づくりをお手伝いしていきます。

そして、今年度はその提案で出てきた意見を元にした企画として、直売所に併設されている加工スペースをお借りして、おにぎりの販売イベントを実施。
「こだわりすぎた収穫祭」として、新たな方向で住民と共に直売所を活用しました。

協力：小林舞（京都大学 学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット・経済学研究科 研究員 / 一般社団法人 FEAST）

▲ なごみの里あさひ 10の提案

KYU

9（KYU）の結成

かめおか霧の芸術祭では「なごみの里あさひ」や、旭町、川東地域の未来を考えるため、9（KYU -Kawahigashi Youths Union-）カワヒガシ若手組合の立ち上げを伴奏してきました。
このチームが今後の地域づくり、活動の鍵となり、若手たちを引っ張って行ってくれる核となっていくでしょう。

9（KYU）
Kawahigashi Youths Union

9（KYU）は京都府亀岡市川東地区の若手農家や作家などのクラフトマンたちが立ち上げた若手組合です。カワヒガシの魅力を伝え、広げ、人を巻き込んで、カワヒガシを盛り上げていきます。

COLUMN

農家に聞いたはなし

『農家さんに聞いたはなし』

私の住むまち、亀岡には農家さんがいっぱいおられるわけだが、なかなかその人たちのことを知ることができないし、話すきっかけなんて全然ない。私は恵まれたことに「かめおか霧の芸術祭」という、今では毎週のようにさまざまな企画が行われている取り組みに参加して、古民家をカフェにしたKIRI CAFEという交流の場をつくったことから農家さんや野菜との出会いをいただいた。

それから369商店という八百屋さんと知り合い、農家さんを巡るツアーにも連れて行ってもらったりするうちに、野菜はもちろん、土について、植物について、亀岡の土地について、また農家さんの生き方や哲学を通してたくさんのことを学ばせていただいたのである。

そうなると、もうこの素晴らしさや難しさ、そして何より野菜の美味しさを誰かに伝えたくなった。友人が亀岡に来た時なんかは好きな農家さんの元に一緒に行き、野菜を買わせてもらったり、話したりしながら美味しい生活をするようになっていた。そんな時に編集者・文筆家である村松美賀子さんと知り合い、亀岡の農家さんのインタビューをしてほしいと頼みに行ったのである。

ところが、村松さんから「亀岡近郊に住む人たちと一緒に、農家さんの言葉を聞き、文章にする講座を開きたい」という提案をもらう。そこで生まれたのが、かめおか霧の芸術祭と亀岡市農林振興課の取り組み【亀岡の風土を伝える 実践を踏まえた編集・ライティングワークショップ】と題した講座。村松さんが共に学ぶ機会をつくってくださったのだ。

予約は瞬く間に埋まり、村松さんの優しく包み込む暖かな空気の中、全４回の講座を開催した。

参加者は亀岡からが半数、大阪や京都市内からも来られ、農家さんから言葉を聞けること、また文章を書くコツを学べる機会をとても喜んでおられた。農林振興課の職員さんも熱心に農家さんを紹介してくださったり、休みを返上して講座に参加される姿勢、すごく寒い中インタビューに長時間同行してくださる姿にすごく愛があり、また亀岡のことが好きになった。

そんなこんなで、さまざまな人の協力のもと冊子が完成したのだが、本当に良いものができたと思う。ぜひ農家さんや野菜のことを知ってほしい。そして自分の身体をつくっている食べ物を知る１つの入り口として読んでほしい。

これからもできることなら第二弾、第三弾と、農家さんの話をいろんな方と一緒に聞きに行きたい。それが少しでも地域を支える農業や農家さんの支えになると、そんな嬉しいことはない。そして、講座に参加された方がいろんな方面でこれからまた活躍されることをとても楽しみにしている。

辰巳雄基

講師
村松 美賀子（むらまつ みかこ） 編集者、文筆家。

「農家に聞いたはなし」はこちらのQRコードから読むことができます。

Project 10

アート×教育

2/19–26 2023

亀岡高校
□と繋がる芸術祭

昨年度も霧芸×亀岡高校として行った展覧会を、今年度も美術・工芸専攻と美術部の生徒14人とともに開催しました。心の中にある強い思いを人に伝えるため言語化し、ストーリーをかため、さらにそれを可視化するためにカタチにしていく。そういった作業は生徒たちにとってとても大きな挑戦となりました。

展示作品の中には、大きなジャガイモを持ち上げることができる「体内に39.4%の救世主あり」や、自由にパーツを動かして気持ちを表現する「私の思いとカタチ」、見たこともない大きさのオオサンショウウオの上に乗る不思議な体験ができる「そこの生きもの」など、どの展示もとても個性的でメッセージ性の強い作品が並びました。

展示

【出展者】（氏名「作品タイトル」）
岡本和奏　「　　」
加納初希　「そこの生きもの」
篠尾菜乃巴　「それぞれの絵に感情表現を出してしまうmeの足」
田中愛美　「私の思いとカタチ」
菱田直央　「体内に39.4%の救世主あり」
福井日菜　「離れない自分」
藤田夢菜　「宇宙の色　-そらのいろ-」
湯浅心音　「私のお守り貴方のお守り」
上繁野乃佳　「hello」
樅木華代　「HAPPY POST」
丸山和夏　「猫」「捕食」「捕食：彩色」

【ワークショップ担当】
岡田彩希・小柴桃香「箱の中身を描いてみよう」

【広報担当】
堀田咲乃　チームディレクション・広報物制作

ワークショップ

2月26日のボンボンマルシェでは「箱の中身を描いてみよう」をテーマに、箱の中身が見えない状態で手探りで触り、感覚だけを頼りに絵を描くワークショップを実施。見えない状態で絵を描くことで、子どもたちは普段いかに視覚に頼って絵を描いているのかを実感するきっかけになりました。

2/7–16 2023

NANTAN TEN
~南丹高校3年生とSDGs~

南丹高校の3年生が「総合的な探究の時間」で身の回りのSDGsについて考え、自分たちができることを作品や映像として表現する展覧会。制作物として10チーム、映像として4チームの合計14チームが展覧会へ参加しました。

制作を進める過程では、霧芸スタッフが南丹高校の授業へ何度も足を運び、生徒たちと展示作品の打ち合わせを重ね、「自分たちの思いや目標、制作のきっかけ」を話し合いながら、それぞれが自分たちの問題意識や興味のあるSDGsの17のゴールについて解決方法を調べていきました。

そうして見出していった「注目したSDGs」「そのテーマを選んだ理由」「取り組みの中で発見したこと」「苦労したこと」もキャプションにして作品と併せて掲示しました。

制作物の展示

［展示タイトル（+チーム名）］
・ゴミゼロアウトドアポスター（チームゴミゼロ）
・おすすめ絵本紹介（おもい～ず）
・SDGsバッグ（サー輝）
・ペットボトルのキャップをワクチンへ（たまごーう）
・ゴミかかし「ダヴィド」（チームかかし）
・亀岡ジオラマ（チームジオラマ）
・スマイルアゲイン（だんご3姉妹）
・かめマップ（カメ丸冒険隊）
・外国人用ハザードマップ（DBS）
・様々な技術と作品（商品制作班）

映像の展示

［展示タイトル（+チーム名）］
・ジャンボタニシを調理してみた（エイリアンハンター）
・環境問題クイズ（グレープフルーツ）
・出雲風流花踊りを踊ってみた（日本の音楽を世界に）
・種蒔きドローン（連携班）

12/12,16,19 2022

こどもうるし体験プロジェクト

漆の魅力をこどもたちに伝える

日本で縄文時代から使われてきた漆の魅力をこどもたちに知ってもらおうと、亀岡ゆかりの２人の漆作家と京都市立芸術大学の学生とともに、2019年度から継続して取り組んでいる「こどもうるし体験プロジェクト『霧空に飛ぶ 金色にきらめく漆塗り竹とんぼを作ろう!』」。2022年度は千代川小学校の４年生90人が参加しました。
クイズ形式の紙芝居で漆の歴史や特性を学んだ後、同大学の学生がこのプロジェクトのために事前に漆を塗った竹とんぼに、こどもたちが砂子蒔きという手法で本物の金箔で模様を付けてオリジナル竹とんぼを制作しました。完成した作品を実際に飛ばして楽しみました。

会場：全て千代川小学校
講師：安井友幸（京都市立芸術大学教授）
　　大矢一成（京都市立芸術大学准教授）

7/16－21 2022

霧芸×京都芸術大学

KIRIVEGE

京都芸術大学の学生が開かれたアトリエを会場に、京野菜をテーマにしたイベント「KIRIVEGE（きりべじ）」を企画しました。
亀岡市は「京の台所」と呼ばれるほど京野菜の産地として有名です。そこで亀岡の美味しい京野菜の魅力や秘密を知ってもらうプロジェクトとして「KIRIVEGE」は誕生しました。野菜をモチーフにした空間展示やフォトブース、せっけん作りワークショップを行いました。

7/17 2022

京やさいを使った、せっけん作りワークショップ

使えなくなった野菜を捨てるのってもったいない。そんな捨てられる野菜を使ったせっけんを作るワークショップ。新しいかたちで野菜と触れ合う機会を創出しました。

定員：2回開催・各回10組（参加無料）
会場：開かれたアトリエ
主催：京都芸術大学 空間演出デザイン学科
　　かめおか霧の芸術祭実行委員会
協力：白石ファーム、みずのき美術館

Project 11

霧芸 × 京都信用金庫

2/4 2023

KIRI² KAMEOKA

～食べて、触れて、亀岡の魅力発見!!～

最近全国から注目を集める熱いまち「亀岡」をテーマに、「マルシェ」「トーク」「食」「体験＆ワークショップ」など、さまざまな角度から亀岡の魅力を感じてもらうイベントを、京都信用金庫 亀岡支店・東亀岡支店とかめおか霧の芸術祭・亀岡市が一緒に企画し、京都市内のQUESTIONを会場に開催しました。
「どうして亀岡は面白いんだろう？」「どうして注目されているんだろう？」 そんな疑問を紐解くさまざまな催しをQUESTION1階から8階の各フロアにギュッと詰め込んで、たくさんの方に楽しんでいただきました。

KIRI² MARCHE 1F

スイーツにパン、お酒に野菜、漬物に焼き菓子など、亀岡の人気店全10店舗が登場。

【出店リスト】
・&Laboratory（焼き菓子）
・VINOGRAD（ワイン）
・Outico（野菜、惣菜）
・コケットグリム（焼き菓子、パン）
・白石ファーム（野菜）
・丹山酒造（日本酒）
・つきよみ（焼き菓子）
・山下商店（漬物）
・洋菓子ベルジェノア（チーズケーキ）
・渡辺製菓（保津川あられ）

▲ 端材を自由に組み合わせてつくるHarvest Passport

▲ 会場のQUESTIONビル

KIRI² WORKSHOP 7F

SDGs未来都市に選定された亀岡市を象徴する「循環」や「自然」をテーマに「木・土・石・廃材・技術」に触れる7つのワークショップを実施しました。

▼木とふれあう
①「カッティングボード作り」
（講師：三浦製材）
②「木屑染め」（講師：オオニシカナコ）
▼土とふれあう
③「箸置き作り」（講師：松楽）
▼石とふれあう
④「漆石アクセサリー作り」
（講師：栗本 夏樹）
▼廃材とふれあう
⑤「廃材でアートづくり体験」
（講師：小澤亜梨子）
⑥ 端材でつくる、ハーベストパスポート
（Harvest Journey Kameoka）
⑦HOZUBAGのハギレパッチワークでオリジナルバッグを作ろう！
（講師：HOZUBAG Mfg.）

KIRI² KITCHEN 8F

亀岡の風土がもたらす豊かな食。冬の寒暖差が生みだす大地の呼吸「霧」に揉まれた野菜はうまい。そんな真冬の亀岡の畑をそのまま味わう「Farm to Table ～亀岡の冬の畑をいただきます～」企画。

【第１部】
「冬の畑をいただきます
～ひと皿からはじまる亀岡の畑への旅～」
ゲスト：東川恵里子（料理家）、片本満大（農家・かたもとオーガニックファーム）

【第２部】
「畑から食卓へ
～サラダ感覚の新しいお漬物～」
ゲスト：宮原聡子（食養生と畑の酵素料理家）、白石暁子（農家・白石ファーム）、長谷川渚（丹山酒造）

KIRI² TALK 4F

アート、農業、子育て、まちづくりなどをテーマに、これからの暮らしを考えるヒントがギュッと詰まったトークを第１部～第５部まで実施しました。

【第１部】

一歩先をひた走る亀岡にQUESTION!!
～これからの時代に求められる
「まちづくり」って何だろう？～

登壇者　桂川孝裕（亀岡市長）
榊田隆之（京都信用金庫 理事長）
仲山徳音（元亀岡市副市長）
YUKO KIMOTO（アーティスト）
持田博行（モデレーター）

【第２部】

アートが暮らしを耕すまちづくり
～かめおか霧の芸術祭が生み出す
「霧と芸術のまち」～

登壇者　松井利夫（かめおか霧の芸術祭総合プロデューサー）
石塚源太（漆作家）
奥山理子
（みずのき美術館 キュレーター）
丹下紘希（映像作家・葡萄農家）

【第３部】

土に触れ、食を生み出す「農ライフ」
～「農」のある暮らしが豊かさを育む～

登壇者　白石暁子（白石ファーム）
辰巳雄基（丹波亀吾郎 店主）
奥岡なぎ
（かめおか霧の芸術祭 KIRI FARM）
持田博行（モデレーター）

【第４部】

子どもの未来を考える亀岡の子育て
～トカイナカの子育てってどんな感じ？～

登壇者　仲田丞治
（自然体験活動アドバイザー）
藤田理恵（わの会 / 青のたすき）
沼田理恵（京都信用金庫）
並河杏奈（モデレーター）

【第５部】

亀ニケーション
～出会いから新たな企画を
生み出す対話の場～

登壇者　吉田哲郎（フロアランナー）
柳井秀哉（京都信用金庫）

KIRI² KAMEOKAトークセッション

一歩先をひた走る亀岡にQUESTION!!

～これからの時代に求められる「まちづくり」って何だろう？～

環境政策、子育て支援、アートによるまちづくりなど、他都市に先駆けてさまざまな取り組みを行う「亀岡市」がいま全国から注目を集めています。亀岡市で実際にどんなことが起こっているのか？　どうして亀岡ではそれが実現できるのか？　豪華なゲストを交えて、理想のまちづくりについてお聞きしました。

（持田）亀岡市は2018年に「プラスチックごみゼロ宣言」を、2020年には「プラスチック製レジ袋禁止条例」を施行し、2021年には「ウッドスタート宣言」「子どもファースト宣言」を立て続けに発表しました。さらには2020年に、全国で10都市だけが選ばれる「SDGs未来都市　自治体SDGsモデル事業」にも選ばれ、「かめおか霧の芸術祭×X」というアートを通したまちづくりにも積極的に取り組んでいます。どうして亀岡ではこのような取り組みが行えるのでしょうか？　市長に就任された当時を振り返りながら教えてください。

（桂川）2015年に市長に就任した際にまず初めに感じたことは「財政が厳しい」ということでした。やりたいことはあっても、ない袖は振れない。これでは市民に対するサービスも福祉の向上もできない。そこで足元を見直すということを始めました。そこで「ふるさと納税」に力を入れる政策を取り、戦略的に目標を掲げて取り組んでいきました。その結果、当初300万円程度だったふるさと納税を翌年には1800万円、その翌年には1億7000万円と、年を追うごとに納税額が増えていき、2021年度は約31億500万円を達成しました。こうした施策によって財源ができ、今では新しい事業を積極的に行えるようになってきたんですね。

また、当時マイナスのイメージが強かった「霧」の魅力を市民に伝えるために「霧のテラス」を作りました。霧が出たときに山の上から見るとこんなにもダイナミックで美しい景観が広がるということを多くの方に知っていただくことができました。さらには亀岡には芸術家が多いということを知り、1人ずつお会いしてお話を伺い、「かめおか霧の芸術祭」というプラットフォームを作ることによって、芸術家の活動と行政が一緒になって取り組む今のような形が生まれました。

亀岡に新しいものを持ってくるのではなく、「今ある

ものをどう光らせるか」ということがとても大事だという思いで取り組んでいます。

（榊田）まちのリーダーである市長が、ご自身の言葉でビジョンやロマン、「このまちをこうしていくんだ！」という強烈なメッセージを、今日もこの距離で市民やみなさんにお伝えしていることがまちづくりにとって非常に大きいことだと思います。

私たち京都信用金庫も、白紙のキャンバスに色を加えていくようなまちづくりを行っていきたいと思っています。いろんな方々の想いが合わさってまちづくりが進んでいくのでしょう。それには手間暇や時間がかかる。その背景には「公益」、特定の人の利益じゃなく公共の利益に基づいてみんなが一つになる。これが非常に大事だと思います。

京都信用金庫は「おせっかいバンカー」と言われていますが、おせっかいを焼いてでもまちづくりをしていきたい。信用金庫がお金のことばかり考えていては信用金庫の役割を果たせない時代になってきました。

ときに金融機関らしくないと言われますが、いったんお金から離れないとまちづくりは見えてきません。逆に離れたことでまちづくりなどが見えてくる。そこではじめてお金が必要になったらお金をくっつけていく。今まで以上に人と人との繋がりを大事にして、まちの人々の生活を豊かにしていきたいと考えています。

（仲山）私は2018年に財務省から出向で亀岡市に来たのですが、亀岡に来る前はフランスにいました。フランスにいながらできることはインターネットを使って調べることくらい。例えば人口が何万人で、どれくらい人口が流出しているのか、観光でどれくらい人が来ているのか、といったことでした。

実際に亀岡に来てみると自然の景観が思った以上に豊かだし、市長や職員と話してみると、亀岡にはアートなど隠れたいいものがたくさんあるなと感じました。自分が頭でっかちに思っていた“まちづくり”に対して、観光資源や農業や文化や人など、物の見方が変わりました。それぞれに魅力があり、そこにいる人の資源をどのように使うかによってもっと高められると感じました。

（KIMOTO）私も海外生活が長くて、イギリスのロンドンに10年間住んでいたのですが、ロンドンと亀岡市の「流れる空気感」がよく似ているなと感じています。ロンドンは、人口の約90％以上が外国から来ている多国籍の街なんです。ロンドンの素敵なところは、それぞれの国の人がその人らしくいられるところ。ロンドンに住むからといってイギリス人っぽくふるまう必要はなくて、その人らしくいることがよしとされています。「朱に交わっても赤くならない」といったところでしょうか。そんな「自分の色でずっといることを許してくれるところ」が亀岡市と似ているなと感じています。

（持田）そういった寛容さという点で言うと、私は桂川市長にすごく寛容さを感じています。市民１人１人の話を聞き流すことなくしっかりと聞いてくださいますし、聞くだけではなくて、実際にそのお話に応えてくださいます。そのあたりは意識していらっしゃいますか？

（桂川）私は普段からなるべく物事を肯定的に捉える癖をつけています。行政はなにかあるとまず初めに「無理です」って断ることが多いように感じますが、職員にも最初から断るなとよく言っています。たくさん課題を与えていただくことも、それを実現するためのお金や人の問題など確かに大変なのですが、まず相手の話を聞いて、そして断るのではなく、判断できないことは一度持ち帰ったらいいと。そこが一番大事だと思っています。

（持田）組織においては寛容さも大切ですが、リーダーシップも非常に重要になると思います。組織を率いていく際に気をつけていることはどんなことですか？

（桂川）組織の上に立つときに、私がぶれてしまうと、すべてがぶれてしまいます。なので、一度志を立てたのならそこを突き進める勇気が必要だと思っています。直接施策を展開するのは職員です。その職員が仕事をやりやすくするために、私が分析し、判断し、決断する。そこがぶれないように、しっかりと説明するようにしています。そこには思いがないと職員に伝わっていきません。なので、その思いが大事だと思っています。

（榊田）すごく共感します。私は私らしく、桂川さんは桂川さんらしく。らしくという言葉を大事にしています。私が2018年に理事長に就任させていただいたときに、最初に2000人の職員の前でお願いしたことが一つあります。一度だけ日本一という言葉を使わせてくれと言ったうえで、「日本一、コミュニケーションが豊かな会社を作ろう」と言いました。

まちづくりもそうだし会社もそうだし、家庭もそうだと思うんですけど、やっぱりコミュニケーションが大事で、違うことを認め合ったり、お互いの個性やスタイルやそういったこと、自分の隣にいる人をリスペクトし合う、こういう考え方やコミュニケーションが大事だと思うんです。

（仲山）組織を動かすためにもコミュニケーションが非常に重要ですよね。亀岡市では、市長が寛容ですべてを受け入れるから下の人は大変です（笑）。市長が市民の意見や要望を大きな間口で受け止め、それが各部署に下りてきます。すると、各部署の部長はみんな「どうしよう、何とかしないと」と走り出します。今度は、その動きに職員が徐々に慣れてきて、私が副市長に就いた頃には、みんな「どうやったらやらずに済むか」ではなく「どうやったら形にできるか」という発想で動いていました。時間などの制約や、人数や法律の問題もある中で、変えられるものは変え、できないものはこれが理由でできないと、その制約の中でできるようにできないか、そのように考えられるチームが亀岡市にはすでに出来上がっていましたね。

（持田）KIMOTOさんは「かめおか霧の芸術祭」の展覧会『開かれたアトリエ展覧会』の企画を進めるうえで市民の方とコミュニケーションを取られることが多いですよね？　実際に市民の方のお話を聞いて感じることなどはありますか？

（KIMOTO）今年、開かれたアトリエでは職業、老若男女を問わずいろいろな方々とたくさんの展覧会をさせていただきました。大学生が段ボールでアート作品を作ったり、知的障がい・聴覚・視覚障がいのある方々の活動を通して作られた作品を展示したり、高校生がSDGsについて考えたことをまとめた展示をしたり、農家さんや老人クラブの方にご協力いただいて展示をしたり。

その中で一つどうしてもやりたいと思っていたことが、性別や年齢を問わず、みんなの手でつくる作品展でした。農家さんが朝早くとれたての有機野菜をたくさんアトリエに持ってきてくださって、それを一番小さくて２歳半の女の子や小学生の子たちが大きな布にいろんな色を描いてくれて、ドレスを仕立て、老人クラブのおばあちゃんと刺繍を一緒に縫いました。

作業中におばあちゃんとお料理の話など、他愛のない会話もできて、そんな時間がとても愛おしく感じました。作業の最終日におばあちゃんに挨拶をしたら、「作業よりもあなたと出会えて話せたことが嬉しかった」と言ってくれました。作品を創ることで時間や思いの共有ができ、そのような思いまでをも共有できる展示になったことがとても嬉しかったです。

（持田）霧の芸術祭もそうですが、市民の皆さんが主役になれる場がいま亀岡ではとてもたくさん生まれていると感じます。ともすれば生活の必需品ではないアートですが、そのアートをまちづくりの中心に据えている、そこにはどんな思いや狙いがあるのでしょうか？

（桂川）市民の文化度を高め、文化が薫るまちを作っていきたいと思っています。市民の作り出すまちの雰囲気が、より文化意識が高いまちを作ると思うんです。そう思った時に感度が高い芸術家と一緒になって活動していくことが必要だと思いました。そこから多くの芸術家さんと会わせていただき、かめおか霧の芸術祭のベースができていったんですね。

こらからの亀岡を考えた時に、亀岡の持つポテンシャルをどう生かせるかが、これからのまちづくりに関わってくると思っています。今、いろんなことをやるにおいてもどんどん人が集まってきてくれています。自己表現ができるまちになってきている。このまちに来ればチャレンジしやすい、可能性のあるまちを作っていきたい。また、オーガニック、子育て、環境、子どもファースト。それらの取り組みに繋がっていけたらと思っています。さらには、令和８年に全国緑化フェアをやろうと思っています。芸術と、花と緑の空間と、景観などの亀岡のポテンシャルを活かしたまちづくりをしていき、多くの人が自分のチャレンジをしに亀岡市に来てくれたら嬉しいですね。

TALK

桂川 孝裕
（亀岡市長）

榊田 隆之
（京都信用金庫 理事長）

仲山 徳音
（元亀岡市副市長）

YUKO KIMOTO
（アーティスト）

持田 博行
（モデレーター）

Project 12

霧芸×資源循環

かめおか霧の芸術祭では芸術家やアーティスト、作家のアトリエから出る端材や廃材を活用する資源の循環や、みずのき美術館が行う不要になった画材を救済・循環させる「巡り堂」と連携をした取り組みを行っています。

1 開かれたアトリエ 資源循環コーナー

亀岡市のSDGs推進の拠点である開かれたアトリエに設置している「資材循環コーナー」の棚を、亀岡高校の生徒とともにペイントして拡張しました。

2 巡り堂

使われなくなった鉛筆やクレヨン、絵の具や習字セットなど、こうした画材類を廃棄せずに次の使い手に繋いでいく画材の循環プロジェクト「巡り堂」。2022年8月21日開催のボンボンマルシェ Vol.4では「巡り堂」とコラボした画材循環コーナーを設置して、多くの方に利用いただきました。

3 市役所の職員と他地域の事例を学ぶ勉強会を行っています

かめおか霧の芸術祭では、全国で行われているアート×地域活性やまちづくりに関する先進事例や世界のサーキュラーエコノミーの事例などを学ぶ勉強会を企画し、市役所職員と一緒に学んでいます。

COLUMN

丹波亀吾郎 かめやき

「亀岡の美味しいお土産をつくりたい」

亀岡で出会う風土、農家さんや、農産物の素晴らしさ。そのことを伝えたいという気持ちから、亀岡新名物 丹波亀吾郎 かめやきが誕生しました。地域の食材を使ったお土産をつくらない？と笑顔で提案をくれたのはTHEATRE PRODUCTSの武内さん。HOZUBAGやその他のプロジェクトで何度も亀岡を訪れている武内さんはいつも面白い提案やクエスチョンを投げてくれます。

せっかく亀岡なんだから、亀の形をしたお土産がいいよね。というところから、実は昔、たい焼きの前に亀焼きという焼き菓子（焼き型）が存在していたことを教えてもらいます。そこで、亀岡ならではのオリジナルの亀焼きを開発しようと、プロジェクトが始まりました。形は地域にある亀の形を調査することからスタート。すると、走田神社という神社の鳥居に、美しい蓑亀（みのがめ）が守り神として鎮座されているではありませんか。

走田神社は亀岡の神社の中でもとっても神聖で、大好きな場所。その出会いに、嬉しさと、神社という地域の人が集う、大切にしている場所でプロジェクトをスタートできるかもしれないというワクワクに包まれました。

地域の議員さんと話し、神社の宮司さんと話し、承諾をもらうことができたので鳥居の亀の型をとらせてもらいました。この亀をモデルに陶芸家 松井利夫さんの手が加わりオリジナルの型が誕生。1つ1つ焼いていく、一丁焼きの型が完成しました。
毎週金・土・日曜日限定で営業を開始。

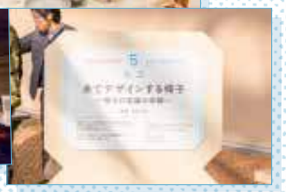
アーティストであり、ライスバレーという自然栽培で小麦をつくる米谷健＋ジュリアさんとの出会いはその中でもかなり大きかったと思います。この小麦を使っておやつを作り、世に送ることで、人が土や自然と繋がるお土産ができるのではないか。そしてお土産というものは大きなメディアになるのではないか。と考えるようになりました。

環境のこと、町のこと、歴史、アートのことや農業のことを知らず知らずのうちに胃袋が受け入れる。触れている。関わっている。
一緒に場をつくっている、支えている。
そんな大きな渦がつくれる。そんな気がしたのです。
季節の変化に敏感に、農家さんや料理人、地域の方からアドバイスをもらいながらメニューを開発しています。

是非、丹波亀吾郎のかめやきを食べながら、お店から見える山々や、田んぼをみながら、一緒に地域をつくっていきましょう。

丹波亀吾郎　一代目

History



2019-2020

2021
足湯
BANK

KIRI

かめおか霧の芸術祭

Kameoka KIRI Art Cultivation

かめおか霧の芸術祭実行委員会

顧問	桂川孝裕［亀岡市長］
委員長	石野茂［亀岡市副市長］
副委員長	西村満［亀岡市自治会連合会会長］
委員	廣瀬照雄［千歳町自治会長］
	吉川肇［旭町自治会長］
	吉田伊佐［洋画家］
	栗本夏樹［京都市立芸術大学教授］
	中嶋知彦［京都府立亀岡高等学校校長］
	前野正博［京都府立南丹高等学校校長］
	山田歌［大本本部総務部長］
	内藤一徳［（一社）亀岡市観光協会副会長］
	平井亘［（一社）亀岡青年会議所副理事長］
	坪倉康孝［（一社）森の京都地域振興社（森の京都 DMO）地域開発部長］
	田中秀門［（一社）かめおかコンベンションビューロー専務理事］
	垣見昌克［亀岡市市長公室長］
	山内剛［亀岡市環境先進都市推進部長］
	由良琢夫［亀岡市産業観光部長］
	久保日出樹［亀岡市教育委員会教育部次長］
	鳥山恒夫［亀岡市参与］
監事	豊田知八［世界に誇れる環境先進都市かめおか協議会会長］
	鵜飼均［亀岡市文化資料館学芸専門官］
総合プロデューサー	松井利夫［京都芸術大学教授］
事務局長	田中博樹［亀岡市生涯学習部長］
事務局次長	小塩睦子［亀岡市生涯学習部文化国際課長］
事務局	服部理恵子［亀岡市生涯学習部文化国際課副課長兼文化国際係長事務取扱］
	岡田春樹［亀岡市生涯学習部文化国際課副課長］
	久保拓也［亀岡市生涯学習部文化国際課文化国際係］
	田村省吾［亀岡市生涯学習部文化国際課文化国際係］
統括ディレクター	辰巳雄基
プロジェクトディレクター	矢津吉隆／山田毅／奥岡莞司
プロジェクトマネージャー	持田博行
KIRI CAFE店長・HOZUBAG工場長	武田幸子
プランナー	KIMOTO YUKO／大西香菜子
クリエイティブ	paragram／UMMM
企画・運営協力	一般社団法人きりぶえ

かめおか霧の芸術祭 ARCHIVE BOOK 2022

発行日 2023年03月

編集	持田博行
写真	岡田春樹 / 小塩睦子
デザイン	宗幸（UMMM）
発行	かめおか霧の芸術祭実行委員会

KIRI Art Cultivation

Kameoka-Kiri-Jo

2022

KIRI
かめおか霧の芸術祭
Kameoka KIRI Art Cultivation